



背景

昭和21年（1946）12月21日午前4時過ぎ、南海地震が発生し、地震発生後10分ほどで須崎湾に津波が押し寄せたようです。その津波の速度は時速25kmにもなったと言われています。津波の到来に逃げ遅れた人々は流木などが流れる中を逃げまどい、須崎で40余名の犠牲者を出しました。この話は、地震後逃げるのが遅くなったため、子ども二人を老母に預けて先に逃げるようにしたところ、三人が津波に襲われ、辛うじて老母と弟は助かったものの、6歳の長女を亡くした父親の話です。

アクセス 津波之碑（須崎橋）

- JR須崎駅より南へ約300m
- 須崎市新町
- 緯度経度 北緯33度23分27秒、東経133度17分37秒

Google
マップ



昭和二十一年（一九四六）の南海地震を体験した人の話です。
歳もおし迫ったあの日、午前四時頃、まだあたりは暗い。震動はなかなか止まりません。寝ていた老人、子供を大声で起こしました。やがてどこかで「おーい津波ぞー。逃げよー」と叫ぶ声、今考えると貴い言葉でした。

私たちは寒さをしのぐため、まず衣服を探して身に着けていました。その間に、刻々時はたつていきました。子供二人を老母につけて、一足先に家を出し北に向け、城山公園へ逃げるようにしました。

私たちも時を移さず後を追いましたが、三〇メートル位北へ行っただけで、北の方からゴーゴーと大きな音をたてながら、津波らしい大波がやってきました。急流のような波は、膝から腰、腹、胸へと、どんどん深くなりました。これでは押し流されて溺れるかも知れないと方向をかえて西向けに、屋根へはい上がり、軒から軒へと伝い渡り、ようやく公園の登り口までたどり着きました。

「母と子供はどうなったか」と気が気ではありません。やがて、夜が明け、波も引き去り、山を下りました。幸いに母と長男は驚きと悲しみと寒さにふるえながらも帰っていました。三人は家を出た後、津波に見舞われ、つないでいた手は断たれて間もなくばらばらになったそうです。長男は近くの電柱につかまっていたところを隣の人に助けられ、母は屋根にかけ上がり潮の引くのを待っていました。しかし、長女はどこへ行っただけ分かりません。

途方に暮れて重い足を引きずり家に帰り、家財道具を動かしていると、土間の箱の下に長女の哀れな悲しい姿がありました。思わず抱き上げましたが、もう冷たくなっていました。「皆いつしよに出かけたら、こんなことにならなかったのに」と、ただ止めどなく涙があふれてきました。